【木兎】

「木兎さん、ちょっといいっスか？」
そう言いながら、赤葦が神妙な顔をしてリビングのラグの上に正座したから、つられた俺も神妙な顔になって（たぶんなってると思う）赤葦の前に正座した。
一八〇オーバーの男二人が膝をつき合わせて、一方の眉間にはめっちゃ深い皺が寄っていて、どう見たって和やかな話し合いが始まる雰囲気ではない。
え、ちょっと待って俺なにかしたっけ？？
ここ数週間の自分の所業をざーっと振り返る。
練習着は使ったその日のうちに洗濯籠に入れているし、朝のゴミ出し当番も忘れずにこなしている。
あ、先週資源ごみの回収日を忘れて赤葦のこめかみに青筋を浮かせちゃったけど、概ね『ふたりで暮らすルール』は守っている――はずだ。
というか俺がなにかよくないことをした場合、赤葦はその場で小言を降らす。こんな風に改まって説教モードに入ることは今までに一度もなかった。（先輩の威厳とは……）

えええ、まじ怖い。なんなの、俺一体なにしたの?!
あまりできのよくない脳みそをフル回転させてそわついている俺に、「木兎さんは正座しなくていいですよ。足崩してください」なんて言って苦笑する。
いや、正座がどうこうじゃなくてな？　まあ、足痛いから崩させてもらうけれども。
俺が胡坐で座り直したのを見届けてから、神妙な表情に見合った重々しい声音で赤葦が話し始めた。
「いつかこういう日が来るのは、覚悟してました……」
「ん？　ああ、そう？」
こういう日がどういう日かわからんけど、覚悟って、お前ほんと男らしいよね。さすが俺の赤葦。……とか、にやにやしている場合ではなさそうだった。話の流れ的に。
「その時は黙って身を引こうと思ってたんです」
「うん？？　……いや、あの」
「泣いて縋るとか、したくねえんスけど」
「え？　ああ……え？？」
「でも俺、やっぱアンタに惚れてるんで――」
うお?!　ここ数年来で一番の赤葦のデレ、キタ？

なんなの、今日なんかの記念日だっけ？　雪でも降るのか？
そういえば今朝のおはようテレビの天気予報でお天気お姉さんが「今日は今年一番の寒さになるでしょう！」ってバックの曇天尻目に元気いっぱい言ってた気がする。日本列島がダイカンパ（漢字変換できてない）に見舞われるとかなんとかって。
確かにまだ昼前にもかかわらず、窓の外は薄暗い。空はどんよりとした分厚いねずみ色の雲で覆われ、いつ白いものがちらついてきてもおかしくはない様子だ。
今年一番の寒さなんて言われている日でも、リビングは暑がりの俺に合わせて暖房は弱めだ。寒がりの赤葦が、体温高めの俺にいつの間にかくっついている（本人は無自覚らしい。お前は猫か。……ああ、ネコだったわ。じゃなくて！）のがいいんだ。
月に数回だけある貴重なオフ日はふたり一緒に家でまったりしていることが多く、今日も存分にいちゃいちゃしてあわよくば昼間のうちにもう一回ベッドに逆戻り、なんて流れにならんかな～と期待してたのにさ。
いちゃいちゃどころか赤葦は妙に思い詰めた雰囲気だし。そんな険しい顔で「惚れてる」とか告られても……って感じなんだけど。
いや、惚れられてるのは嬉しいけどね？
まあ、惚れられてるのは知ってたけどね？

「俺は……」
「あ、はい」
この深刻かつ重苦しい空気に耐え切れず、つい、思考のお花畑に逃げ込もうとする俺の意識を赤葦の切羽詰った声が引き戻す。
「アンタと別れたくないです」
「は？　俺も別れたくないよ？」
きょとんとする俺に、赤葦は畳み掛けた。
「でも俺、二股……だか三股だか四股だか知りませんけど、掛けられるの我慢できないッス！」
「はぁ？？　木兎さん、そんなにたくさん股もってないです！」
「股ってそういう意味じゃねえでしょ！　ふざけてるんスか?!　ぶん殴りますよ?!」
「あ、そうなの？　いや、ふざけてねえよ！　ていうかぶん殴るってお前、セッターなんだから手を大事にしろよ！」
「俺の手のことは今どうでもいいんスよ！」
「よくねえだろ！　俺にトス上げらんなくなるだろうが！」
「トス、トスって、大事なのは俺のトスだけかよ！」

「ンなことは言ってねえ！」
　言い合いは徐々にヒートアップし、八畳のそれほど広くないリビングに俺たちの怒鳴り声が響く。
　おいおい、これって俗に言う『シュラバ』（これも漢字変換できてない）ってやつじゃねえの？　股掛けがバレて別れる別れないのバトル。なんか若干別の要素も混じってるし胸倉掴み合っちゃったりして世間一般の男女のシュラバよりもストレンジでバイオレンスな感じはするけど。
　……あれ？　え、待って。俺浮気疑われてんのか?!
「ちょっと落ち着け、赤葦。別れるとか二股とかさ、なんでいきなりそんな話題が出てくんの？」
「自分の胸に訊いてください」
「いいよ？　いくらでも訊くけどね？　ぜんっっぜん心当たりなんか――……」
　無い！　と言い切ろうとして、心当たりらしきものがちらりと一瞬頭を掠め、俺の声は尻すぼみになっていく。
「無……くもない気がするけどそれは赤葦が考えてるのとはちょっと意味が違うと思うんだよな～……」

視線が泳いだのを赤葦は見逃さず、俺の胸倉を締め上げる手に力が入る。……く、苦しいってばよ！
「いやいやいやいや、待ってくれ。誤解だ。浮気がバレてめっちゃ言い訳してる彼氏みたいな感じになってるけど違うから！　ほんと、木兎さん浮気なんてしてないから！」
「往生際が悪いっス。男らしくねえ」
「えー……」
もっと潔いかと思ってましただの見損ないましただの言いたい放題言われ、さすがの俺もムッとする。
「お前なぁ……、今からお前が誤解してそうな心当たり一つ一つ説明してくけど、全部聞き終わったあと後悔すんなよ？」
「あ、すんませんっした（棒）」
「オイコラ。まだ説明始めてもねえだろうが！」
潔いんだか投げ遣りなんだか、赤葦は俺の胸倉を掴んでいた手をあっさりと離し、ペコリと頭を下げた。
どうせ、『木兎さんのことだから、浮気してたらもっとはっきりとしたボロがでるよな。嘘も下手だから釈明とかもできねえだろ。てことは今回のは浮気じゃねえんだな』とかな

んとか失礼なこと考えたんだろう。（概ね合ってる）
「お前が引っ掛かってるのって、最近練習のあと俺がひとりで出かけて夕飯いらないって言うことが増えたとか、誰かとこっそりライ〇で遣り取りしてるみたいだ、とかそういうことじゃねえ？」
　赤葦が素直に、こくりと首肯する。
　この件については、まあ、できるなら隠しておきたいことだったけれど、赤葦を不安にさせてまでどうしても隠し通さなくてはならないことではない。俺もさっさと種明かしをした。
「まずラ〇ンの相手は白福と雀田。練習のあとに出かけてる場所は白福ん家か雀田の家。ちなみにふたりきりじゃねえ。どっちの部屋に行っても白福と雀田は揃ってた。俺のスマホ見ていいし、あいつらに確認とってくれてもいいよ」
　梟谷学園時代のバレー部女マネ二人の名前を出しただけで疑いは九割方晴れたらしく、某メッセージアプリのトーク画面を開いて差し出した俺のスマホも「見せなくていいです」と押し返してきた。
　そりゃそうだろう。さすがの俺もあの猛禽マネふたりに手を出そうとは思わないし（他の女にも出さないけど！）、あいつらが俺の相手をするはずがないと赤葦も重々承知して

いるからだ。
「……あの、でも、白福さんと雀田さんの部屋に行く理由がちょっとわからないんですが」
「料理教えてもらってたんだよ。ああもう！　十四日のサプライズにしようと思ってたのに！」
そう。きたる二月十四日のバレンタインデーに、俺はサプライズプレゼントとして赤葦に手料理を振る舞おうと計画していたのだ。
妙な誤解をされると困るから、大学の知り合いの女子には料理指南を頼まなかったのになー。結局バレて疑われてしまった上に、肝心の赤葦の反応は驚くとか喜ぶからは程遠い。
(まあ、ある意味驚いてはいるんだろうけどさ)
おいおい。木兎さん、これはちょっと納得いかないんですけど。
唇を尖らせた不満顔の俺と、眉間の皺が消えない赤葦。
誤解は解けたはずなのに、俺たちの間に漂う空気はいまだに冷たく刺々しい。
「料理……スか」
「うん」
「俺の作るメシ、そんなに不味かったっスか……」
「ちっげーよ！　なんでそうなるんだよ。不味いどころかウチの母ちゃんよりも美味いよ、

赤葦が作るメシは！」

一緒に暮らし始めてそろそろ十ヶ月。同棲開始当初はふたりとも外食ばかりだった。

俺にはそもそも自炊するという発想がなかったし、赤葦も実家から出たばかりで自炊の経験も技術もまったくなかった。……が、やはり外食ばかりだと栄養は偏るし経済的ではないとのことで、『基本のお料理』だの『初心者さんのレシピ本』だのを赤葦が買いこんできたのはわりと早い時期だ。

今じゃその辺の主婦顔負けの腕前で、レシピアレンジとかあり合わせの材料でささっと何品目も作っちゃうとか、なにお前『KEIJI's Kitchen』とか目指しちゃってんの？　ってな具合である。

あ、話がかなり脱線しちゃいましたけれども。

赤葦が料理をするのが「当たり前」のようになってしまっていた今日この頃。それが当たり前などではなく、ありがたいことなのだと俺は気づかされたのだ。

それは少し前のこと、赤葦がインフルエンザに罹って実家に戻っていた時のことだ。

俺は、外でなにを食べても美味くない、というか味がよくわからない、という味覚オンチ状態になった。赤葦の体が心配だったとか、赤葦と一緒に食べないとつまらないとか、そういう精神的な理由もあったと思うけど、なによりもやはり、赤葦の作る飯向けに俺の

舌が変わっていたからだと思う。味覚が変化するほどに、赤葦は俺のために料理を作り続けていてくれたのだ。
バレーで疲れて部屋に帰って来るのは俺だけじゃなかったのに。赤葦だって疲れていたはずなのに。ほぼ毎日毎日、俺のために頑張ってくれちゃってたとかさぁ……。
（ああもう！　赤葦まじ愛してる！）
って叫びながら近所中を走り回りたいくらいなのだ。
いや、赤葦に激怒されるからそれはやらないけどね。
というわけで、ちょうどバレンタインも近いことだし、プレゼントとして、愛と日頃の感謝をこめた俺の手料理を赤葦に食べてもらおうと思ったのだ。
でも俺、普段は皿並べたり洗ったりぐらいしかしないから、初心者向けであろうとレシピ本を見ながら調理をするなんてハードルが高い。めっちゃ高い。
だったらもう、アスリートらしく（？）体で覚えるしかなくね？　ってことで――。
「変な誤解されそうもないあのふたりに『料理教えて』って頼んだんだけどさー」
「……そっスか」
一通り説明し終わっても赤葦の表情は晴れない。
「なあ、俺まだなんか疑われてたりすんの？」

「いや、そうじゃないんスけど。……ちょっと気が抜けて」
はぁぁぁーーー……と、それはそれは長い息を吐いて赤葦は床に突っ伏した。
たぶんまだ、赤葦の頭は――というか心は、俺の手料理云々の話まで理解が追いついていないんだろう。
赤葦って、頭いいくせにこういうところはほんとダメ。バレーでは立派に司令塔務めてるんだから、頭が固いってわけではないのにな。
『俺のこと』になるとダメ。もうほんとダメ。
俺がいつか必ず赤葦から離れていくって、それが当たり前だって思ってる。
そんなことありえねえのに。
でも今回、「別れたくない」って言ってくれたことは進歩かなーって感じだけど。

「赤葦」
突っ伏したまま身じろぎしない赤葦の髪を、わしゃわしゃと掻き混ぜる。
「……はい」
「俺から離れる覚悟なんか、する必要ねえから」
「……はい」

早く、『木兎さんは俺がいないと生きていけないんだ』ぐらいに思えよ。気づけ。

「木兎さん……」

「ん？」

床から、躊躇いがちな、くぐもった声がする。

なあ、いつまでその体勢なの。いい加減顔上げねえ？

「包丁持ったんスか」

「おう、持った！　初めて持った！」

高校の家庭科の調理実習の時でさえ包丁を持たずにいた俺が。確か、馬鹿に刃物はどうたらこうたらって、同じ班のヤツが失礼なこと言って持たせてくれなかったんだよ。

「指大丈夫っスか？」

「一応まだついてる。っつーか包丁使うの上手いって白福に褒められたんだぞ、俺！」

「木兎さんの包丁始め、見たかったっス」

そう言って顔を上げた赤葦の目元は少し赤くて、俺は苦笑いしながら、目尻に滲んだ雫の名残りを親指でそっと拭ってやった。

15　愛も変わらずなふたり

【赤葦】

「じゃあ始めんぞ、赤葦！」

学生向けの部屋にしてはそこそこ広めなキッチンに立ち、木兎が気合い充分な声を上げる。

始めるのはわかったから包丁を人に向けないでくれ、とまず言いたい。

修羅場の様相を呈したあの日から一週間後の今日、二月十四日。

木兎が初の手料理を赤葦に振る舞ってくれることになった。

ちなみにあの日から木兎は三回ほど白福と雀田の部屋に行っている。あのふたりと木兎の間に間違いが起こるとは露ほども思っていないが、もうサプライズではなくなったのだから、家で俺と練習すればいいではないか――と赤葦は思っていた。

――これは嫉妬ではない。断じて。

誰にともなく、言い訳めいたことを胸中で呟く。

「で、今日はなにを作ってくれるんですか？」

シンク脇の調理スペースに置かれた材料を見ればだいたい見当はつくが、一応訊いてみ

た。そして木兎は赤葦の予想通りの料理名を口にした。どうだ、凄いだろうって自慢する子どものように目をきらきらさせて。
「肉じゃが！　初めての手料理はやっぱ肉じゃがだろ！」
「ベタっすね」
「あかーし！　今は『肉じゃが嬉しいっス！』って言うところ！」
「ああ、肉じゃが嬉しいっス」
「あかーし！　台詞が棒すぎる！」
と、まあ木兎の口は達者に動いており、その口と連動するように手もよく動いている。
これは別段驚くほどのことではない。木兎は鷹揚で大雑把な性格だが、その性格に似合わず何事もわりと器用にこなす。スポーツに限らず、大抵のことに関しては『天性の勘』というやつが働くからだと思う。
白滝のアク抜き用の湯を沸かしている間にニンジンやジャガイモの皮をピーラーで剥き、だしだしと男らしく豪快に切っていく。そしてタマネギの薄切りに取り掛かったところで、一旦木兎の手が止まった。広い背中が小刻みに震え、後ろに立っていた赤葦を振り返る。
「あがぁーじぃー……」
「はいはい」

金色の目からぽろぽろと落ちる涙をティッシュで拭ってやる。
（ああー、くっそ可愛い……）
百八十五センチのパワー5リラには相応しくなさそうな感想だが、赤葦の目には可愛く見えるのだから仕方がない。
「タマネギはこれがあるからイヤだよなー……。いっそゴーグルして切りてえよ」
「……そうっスね」
ぐずぐずと鼻を啜りながら愚痴る木兎に、赤葦は舌打ちを堪えて相槌をうった。
タマネギは冷やしてから切ると涙が出にくいということを、白福や雀田が知らないはずがないのだ。彼女たちはそれを知っていて木兎に教えなかった。赤葦も今教えてやらなかったわけだが、そこはまあ都合よく棚上げである。
自分以外に、そして自分より先にこの可愛い泣き顔を見た、したたかな女マネふたりのことを思うと胸がモヤつく。
（まさか、あのふたりにもこうやって涙拭いてもらったんじゃねえだろうな？？）
なんて考えていたら、つい、木兎の目元を拭う手に力が入っていた。
「ちょ、赤葦、強い、痛い、目が潰れるっ！」
「あ、すんません」

赤くなってしまった瞼や目尻に、詫びるようにそっとキスをする。
「……赤葦くん。そういうことは料理が終わってからにしてくれないかな？」
「いや、もうやらないんで」
「あかあしー……」
いつもは凛々しく太い眉毛を八の字にした目の前の大男は、某蜂蜜好きな黄色いクマを連想させ（赤葦の目には）やっぱりたいそう可愛らしく見えた。

具材を揃えたあとは早速調理に取り掛かる。
まず肉じゃがの野菜に火を通すために炒める時は、砂糖で炒めると後々味が沁みやすくなるんだ、と言いながら木兎は雪平鍋を振っていた。白米を炊く時は蜂蜜を少しだけ入れるとふっくらツヤツヤになると言って炊飯器のセットも完了。肉じゃがを煮込んでいる間、赤葦の好きな豆腐とわかめの味噌汁を手早く作り、さらには菜の花をさっと湯がいて流水で冷やし始めた。どうやら辛し和えまで作ってくれるらしい。いつまで経っても正式名称を覚えず、「黄色い花が咲く葉っぱに辛子を混ぜたやつ」だの「赤葦が好きな葉っぱの苦くて辛いやつ」とか呼ぶけれど。

そうこうしているうちに、鍋の中では飴色の美味そうな肉じゃがが出来上がった。白米も炊きあがり、菜の花の辛し和えも小鉢に盛り付け、味噌汁を軽く温め直して椀によそう。
これで木兎の初手料理、完成。
品数は決して多いとは言えないが、木兎の手際は終始淀みなく、危なげもなかった。
ふたりの部屋には今、空腹を刺激する匂いが充満している。
「美味そうじゃね？」
「美味そうですね」
ダイニングテーブルに並べた料理を見て、木兎は満足そうだ。
「食おうぜ。腹減った」
「はい」
向かい合わせに席に着き、ふたり両手を合わせて『いただきます』をした。

まずはメインである肉じゃがに箸を伸ばす。挟むとすぐに崩れてしまいそうなほどよく煮えたじゃがいもは、口に入れた瞬間舌の上でホロリと溶けた。イモ本来の旨みと他の野菜や肉の旨みが混ざり合い、口の中で優しく広がっている。美味い。
次は味噌汁の椀に手を伸ばす。豆腐の大きさはバラバラだし、わかめも所々繋がってい

る部分があって連なった国旗のようになっていたが、赤葦が料理初心者の頃にやらかした「お湯に味噌を溶いただけ」の味噌汁ではなく、しっかりと出汁がとれていた。これも美味い。

赤葦の好物である菜の花の辛し和えは、菜の花のシャキシャキ感が残っており、苦味も辛味も赤葦好みに調理されていた。美味い。

（やばい……。クソっ、泣きそうだ……）

辛子のせいではなく、目と鼻の奥がツンとする。

目に力を込めながら黙々と料理を口に運んでいたら、「え、なんで赤葦怖い顔して食ってんの?!　不味いの?!」と、木兎を大層慌てさせてしまった。

木兎の優しさが嬉しい。それと同時に、やはりこの男は、自分がいなくてもちゃんと生きていけるのだという（それが当たり前のことなのだが…）謎の寂しさがこみ上げてきたことは……ちょっと、言えない。

食後のコーヒーを持ってリビングのソファーに座っている木兎の隣に行くと、期待に満ちた目で見つめられた。さあ褒めろ、とばかりに。ちなみに、このような「褒めろ」催促

は食事中を含めてすでに五回目である。正直もう、ちょっと面倒くさい。
「……美味かったって、何度も言ったじゃないスか」
「ちょ、赤葦、その嫌そうな言い方！　ってかそうじゃなくて……」
「なんなんですか」
料理の出来を褒めただけではダメ。作ってくれてありがとうの感謝は出来を褒めた回数以上に伝えた。それでもダメ。あとはなにをすればいいのだ。……わからない。
赤葦京治は女にモテた。中学・高校と、それはもうモテまくった。そして人並みにお付き合いなるものもしてみた。
――が、バレー漬けの生活ゆえ、長続きしたことがない。手料理を作ってもらったあとの正しい対応など、わからない。
わからなかったのだが、このまま放置しておいたら目の前の男が確実にしょぼくれることはわかっている。それは今以上に面倒くさい。……ということで、ストレートに訊いてしまうことにした。
「困りましたね。俺はどうしたらいいんですか。どういう反応をしたら、木兎さんは満足するんです？」
「……赤葦、お前、考えることを完全に放棄しただろ」

「……」

視線をさりげなく木兎から外し、コーヒーを一口ゆっくり飲んで、図星を指された動揺をごまかす。しかし木兎もこのままでは埒が明かないと気づいたのか、深い溜息を一つ吐いてから唇を尖らせ、ボソボソと話し始めた。

「今日ってさ、バレンタインデーじゃん」

「そうっスね」

「今日の手料理って、日頃の感謝と俺の愛がこもったチョコがわりじゃん」

「うわぁー、アレもコレも一気にまとめられちゃった感ありますねー」

「言い方……」

「それで？」

「それで……、俺って赤葦の彼氏じゃん。何度も言うけど今日はバレンタインデーじゃん」

「回りくどいな……」

「だから言い方……」

つまり、赤葦から木兎へのバレンタインデーの贈り物はないのか――、ということだろう。なんでそれぐらい気がつかないんだよ、とでも木兎は言いたげだが、赤葦にも言い返しておかねばならぬことはあった。

「木兎さん、今コーヒーに添えて出したマロングラッセ、デル・レイのやつで一粒九百円です」
「……は？　なにがきゅうひゃくエン？？」
「コーヒーに菓子が添えてあったでしょ。あれ、マロングラッセです。チョコレートがあまり得意じゃない本命の彼氏への贈り物として人気なんですって」
　先ほど、木兎がヒョイっと摘んでポイっと無造作に口に放り投げた深い飴色の砂糖漬けの栗、一粒九百円な～り～、だ。
「マ、マジか……ほぼ丸呑みした……ってか、まろん…なんとかってナニ？？」
「チッ」
「舌打ちっ?!」
　舌打ちぐらい大目に見てもらいたい。なにしろ九百円の金の粒が、大学の学食で最も高いC定食にデザートをつけてもお釣がきてしまう値段の粒が、大して味わうこともされずに一瞬で消えたのだから。
（ほら見ろ！　値段がわからねえどころかマロングラッセも知らねえじゃねえか！　だからこの人にはチ.ロ.ルチョコで充分だって言ったんだよ！）
　赤葦は、今ここにいない長身でトサカのような髪型をした男に胸中で悪態を投げつけた。

そしてトサカの言いなりになってしまった数日前の自分もぶん殴りたくなった。
先日、他大学バレー部との合同練習・試合の際に会った高校時代からの馴染み、黒尾鉄朗に、ニヤつきながら言われたのだ。
『あの木兎がチョコがわりに手料理をプレゼントしてくれるんだって～？　それじゃお前もちょーっとイイもん返さねえとなぁ？』
と。
赤葦は、自分との関係を他言することを木兎に固く禁じている（言ったら即別れると脅している）ので、ふたりのことを知っているのは元梟谷バレー部レギュラーメンバーと悪友である黒尾（とその幼馴染の孤爪。彼には言わなくても気づかれた）ぐらいである。そのため、木兎はメンバーや黒尾になんでも話してしまう傾向がある。それこそ赤葦が所有している下着の色はグレーが多いとか、くだらないことまで、だ。
今後はその辺りの禁止事項も増やしておかねばなるまいな……と考えていた時、黒尾がバレンタイン特集記事が載っている某女性雑誌をおもむろに開いた。
なんでそんな雑誌持ってるんですか黒尾さん、とは思ったが、面倒なので突っ込まない。スルースキル、大事。
『これなんかいいんじゃね？』

と指差したのが、先ほど木兎に丸呑みされたデル・レイのマロングラッセである。
『そんなのあげても、木兎さんは多分気づきませんよ。無駄です。チ・ロ・ルかなんかでいいんじゃないですかね』
と返したあの時の自分は正しかった。
『コンビニの板チョコで充分』
と黒尾の横でボソッと発言したプリン頭・孤爪研磨も正しかった。
『お前ら木兎をなんだと思ってるの』
『いちおう彼氏だと思ってますけど』（赤葦）
『うるさい他校のひと……』（孤爪）
『俺は今日、初めて心から木兎に同情したぞ』
『ああそうですか（棒）』（赤葦）
『ふぅん（棒）』（孤爪）
などという、黒尾さん厨二発言はそろそろ勘弁してください的やりとりがあった。
それなのに何故、結局自分は黒尾の意見を聞いてしまったのか……。
それはやはり、『木兎の初手料理』に少なからずときめいて浮かれてしまっていたからなのだ。

（もっと冷静になれなかったのか……あの時の俺）

しかし、いまさら悔いてももう遅い。

「女性でごった返していたデパートのバレンタイン特設売り場に男一人で乗り込んでいった俺の勇気と根性を評価して戴きたいんですけど」

多数の女性客の中に男が紛れるだけでも目立つのに、赤葦は一八〇オーバーの長身だ。好奇の視線が全身に突き刺さりまくった。あの時の恥ずかしさを思い出して菩薩顔になりかけた赤葦である。

「あ、ありがとうございます。嬉しいです」

「どういたしまして」

「……なあ、そのまろんなんとか、もうないの？」

「『マロングラッセ』です。いちおうあと三粒ありますよ」

「もらえる？　今度はちゃんと味わって食うから」

「はあ。まあ、木兎さんへのプレゼントですから、もちろん差し上げますけどね」

赤葦は席を立ち、食器棚の奥に隠しておいた箱を持って木兎の元に戻ってきた。

こげ茶に金箔押しのブランドロゴの入った、いかにもお高そうな箱。デル・レイを知らない人間でも、中身の値段はだいたい想像できる。――木兎光太郎以外は、だが。

綺麗にラッピングされたままで木兎にこれを渡さなかった理由は、美しく整えられた包装も木兎にかかれば一瞬で無残な状態になるとわかっていたからだし、中身だって『知らずに丸呑み』の可能性がやはり捨て切れなかったからだ。そしてそれは見事に的中した。

（ま、残り三つを充分味わってもらえばいいか）

そう考えながら、赤葦はマロングラッセを一つ、ポイっと自分の口に放り込んだ。

「えっ、あ、あかあしっ?!　俺にくれるんじゃ――」

慌てる木兎の胸倉を掴み、ぐいっと自分の方に引き寄せる。

ぽかんと開いた口に自分のそれをくっつけ、軽く咀嚼したマロングラッセを木兎の口腔内に移した。

マロンのコクとシロップの優しい甘味が舌の上にふわりと広がっている。これならば確かに、チョコレートの甘さが苦手な男でも食べられるかもしれない。

まあ、木兎はチョコレート嫌いではないが。

「どうです？　美味いですか？」

唇は離したが、顔を近づけたままで訊くと、木兎は少し不貞腐れたようにボソボソと答えた。

「……こんなんで味なんか……わかるわけねえだろ」

頬がほんのり赤く染まっている。
口移しをしたぐらいでいまさら照れるな。こっちまで照れる――なんて悪態はちょっと吐けない。
だって……可愛い。……ゴリラのくせに。
「それはすみませんでしたね。じゃあ、あとのはご自分で、どうぞ？」
「やだ。残りも今みたいに食わせて」
「味わって食うんじゃなかったんですか？」
「そっ、そうだけど！　……なんかこう、バレンタインらしく、いちゃいちゃしたいじゃん！」
いちゃいちゃするのは赤葦もやぶさかではないのだが、やはり九百円の金の粒は普通に味わって欲しいとも思うのだ。
「いちゃいちゃは今でなくてもいいでしょう？」
「今がいい……」
「あ、そうだ。洗い物、まだ終わってないですよね。片付けが済むまでが料理ですよ、木兎さん。その間に俺、風呂入ってきますから」
「片付けは明日やるし。俺も赤葦と一緒に風呂に入りたい」

「はあ……」
「ためいき止めて！　木兎さん泣きそう！」
「いいから黙ってそのマロングラッセ食べちゃってください。あ、ちゃんと味わってくださいね？　それから皿を洗っておいてください。その間に俺は風呂に入ってきます」
「だから俺も一緒に――」
「いろいろ準備があるんです！」
察し悪くぐずぐずとごねる木兎をぴしゃりと制し、ベッドのある寝室の方へと視線を促した。
「いちゃいちゃは……あっちでしましょうよ」
「っ!!!」
木兎は、赤葦が言い終わるや否や残りのマロングラッセを口に放り込み（やっぱり味わってない…）、びゅん！　と漫画のような効果音がつきそうなほど急いで皿を洗いに行った。
そりゃあ確かに『メインのプレゼントは俺です』的意味合いで言ったのだけれども……。言い慣れない誘い文句がクソ恥ずかしくて死にそうになった。眩暈がする。
（でも喜んでるみたいだし。……いいか）

無理矢理自分を納得させ、赤葦は風呂場に向かった。

愛も変わらずなふたり（了）